

生活の中に生きる江戸簾

風を編み、

暮らしを演出する

伝統の技。



# 内掛すだれ



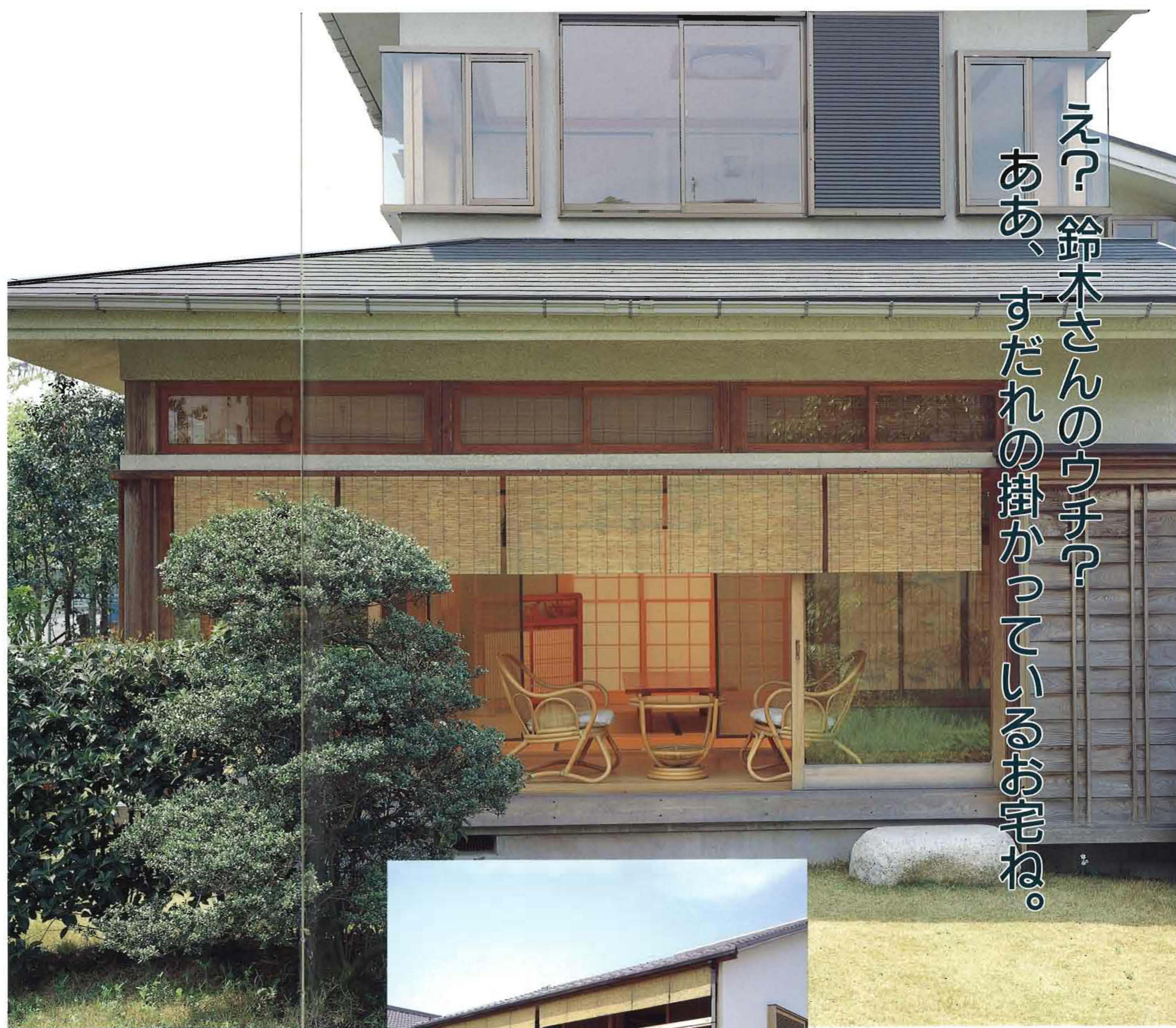
すだれの掛かっている部屋から、  
誰も出てゆくとしない。

もちろんすだれは、カーテンやブラインド、襖のように日常の生活になくはならないものではありません。けれども、一度すだれのある暮らしを経験した人にとっては、これはもう、必需品というか、片時もすだれのない部屋には居たくない気持ちが強いです。それほど、このすだれには何か素晴らしい魅力が潜み、インテリアを超越した、人びとの心をとらえて離さない神秘的な力が宿っているのです。

たとえば、現代人の願望のひとつに、すだれの掛かった畳の上でうたた寝をしてみたい、というのがあります。優雅で格調高い夏のひととき。風は色づき、芳香を放ちます。まどろみの中で見る遠い昔の夢。すだれの吟味された天然素材と繊細な技法が記憶の糸を紡ぎ、懐かしい香りに包まれた過去へといざなっているのです。すだれ越しの風は、かくも人を感傷的にさせるものなのではないでしょうか。

すだれの向こうに見える自然の景色は、額縁に飾られた一枚の絵のように以前より増して輝きはじめ、室内との調和を図っています。憧れていた生活が、こんなカタチに……。もう、すだれの暮らしたなんて考えられません。

# 外掛すだれ



え？鈴木さんのウチ？  
ああ、すだれの掛かっているお宅ね。

なんて、別名すだれ邸と呼ばれている鈴木さんち。でも、当人は大満足。週末ごとに客を呼んで自慢のすだれを披露しています。それも自分で迎えに行かないで、すだれを目印に客に自宅を捜し当てさせる念の入りよう。家の外観、というよりもすだれの第一印象を聞くのが何よりも楽しみと。よっぽど気に入っているのでしょう。

まず、静かです。落ちていたたたずまいを見せている。これが最も多い意見。実際に中に居ると、周囲の物音が気にならず、鳥のさえずりや樹の葉のこすれ合う音だけが風に乗って運ばれてくる、とうなずく鈴木さん。微笑が絶えません。かすかな風ですだれがゆっくりと揺れる様を見ていると、時間の流れを忘れてしまう。遮光や目隠し、通風など本来の働きや利点よりも、こういったすだれに対するイメージ的な意見が多かったことも、鈴木さんを喜ばせました。

すだれのある部屋で手厚くもてなしながら、すだれの良さを講釈する鈴木さん。でも帰り際、もう一度振り返ってすだれが見つめられていることには、気付いていないようです。

# 応用すだれ



すだれは窓際に掛けなければ、と考えるだけでは大間違い。すだれ障子、衝立、屏風など、部屋の間仕切りや玄関にもよく合います。カーテンやブラインドと異なり、どこにでも手軽に掛けたり置いたりでき、また取りはずせるので部屋の模様替えなどには最適です。いろいろなアイデアを絞ってみてはいかが？ きつとあなただけの独創的な空間が生まれるでしょう。

すだれには和室、なんて考え方ももう古い。洋間の一角に畳のコーナーがあるリビングがもてはやされているように、洋風の中にとけ込む日本の伝統もまた趣があります。洋の機能美と和の形式美の融合と調和は、新しいライフスタイルを確立し、新しい時代のオリジナリティに富んだ生活時間を追求していくことでしよう。

すだれのあるマンション、なんてオシャレじゃありませんか。画一化された外観、間取りだからこそ、工夫の余地が残されており、個性的な空間づくりへの励みがあると思います。さあ、チャレンジしてみましよう。



限られた空間のはずなのに、  
無限の広がりを見せはじめた。

Short Story

# 小物すだれ

すだれのある暮らしに乾杯。



目の前にすだれのランチョンマット一枚。ランチョンとはランチョンやや正式な昼食のことですが、すだれの場合には何にでもあいます。が、ぬれ縁に広げるのなら、やっばり生ビールと枝豆でしょう。かき氷やクリームあんみつもマル。ティーブルなら、そうめん、水ようかん。すだれから季節にマッチした風味が連想されます。夏ばかりではありませぬ。冬なら鍋敷き。和風スパゲッティなどは、味覚、視覚の両面から日本の味を主張できます。食生活でいえば、のり巻きすだれやせいろ用すだれは、日本の食文化とは切っても切れぬ仲。天然素材を生かした深い味わいが、ふくよかに広がります。



江戸簾の歴史と沿革



簾は、室内のしきりや日よけなどに古くから使用されてきました。平安時代の中頃、清少納言によってかかれた『枕草子』の中にも記載がみられ、宮廷生活の中に簾が溶けこんでいたのがわかります。また、重要文化財に指定されている鎌倉時代の簾が神奈川県のお寺に保存されています。簾は古くから伊予簾が有名ですが、京都のものが最上級とされ「禁裏翠簾師」といった高級品専門の職人もいました。江戸においても、徳川家康の江戸開府以来、江戸の繁栄につれて、江戸城、武家屋敷、神社仏閣あるいは商家への簾が用いられるようになってきました。江戸時代元禄期に発行された「人倫訓蒙図彙」などには御簾師（屋）がいたことが記されており、当時既に簾専門の職人がいたことがわかります。簾は将軍、大名、宮廷などの高貴な身分の者ばかりでなく、庶民の間にも広がって、日よけ用に多く用いられるようになりました。浮世絵の中にも簾がしばしば登場しています。明治以降も、簾は、家庭や神社などにおいて使用されてきました。明治五年（一八七二年）発行の『東京府志料』には、府内各地で簾が生産されている状況が記されています。近年、ビニール製のものや中国などの輸入品ものに押されて、手づくりの簾の需要は減少していますが、室内装飾品として見直されてくるなど新たな発展への契機が芽ばえてきつつあります。江戸時代から三〇〇年余りにわたり継承されてきた技術を基礎に、現代の生活様式に合致したデザインと秀れた品質の製品をつくりだす努力が続いています。



すだれの持つ不思議な魅力のひとつに、向こう側がぼんやりと透けて見える、というのがある。細かい霧を撒いたように、ほのかに白っぽく……。けれども、その像は、現実よりはるかに奥行きがあり、輪郭を鮮明に見せている。日本の風土と自然に育まれた、すだれというフィルターが、そのものの真実の姿を映し出しているのだ。目に見えるものがすべてではない。限らないイメージの世界が、常にすだれの向こう側で創られている。



東京都伝統工芸品マーク

●東京都の伝統マーク

このマークは、「東京都知事指定  
伝統工芸品」について、都の紋章  
と伝統工芸の頭文字の「伝」をあ  
しらったもので、検査に合格した製  
品にのみ、貼ることとなっています。

案内図

◆交通

地下鉄日比谷線 入谷駅  
地下鉄銀座線 田原町駅  
JR 鷲谷駅  
都バス 千束(JR日暮里⇄JR錦糸町)

---

株式会社 田中製簾所

本 社 東京都台東区千束 1-18-6  
〒111-0031 電話 03(3873)4653(代)  
FAX 03(3874)0746

倉 庫 東京都台東区今戸 2-30-9